

音の出る絵本を取り入れた中学年のための小学校外国語活動

—高学年の外国語活動の準備段階としての活動— 共同研究

代表者：東京都／新宿区立戸塚第一小学校・愛日小学校 外国語活動コーディネーター 執行 智子

概要 本研究は、新宿区立の小学校4年生の外国語活動に、音の出る絵本を使用した課題解決の活動がどのような効果をもたらすかを調査したものである。その結果、第1に英語を読むことに対する態度や意欲に項目について対応のあるt検定を行った結果、有意な差は見られなかった。よって、本活動が児童の英語を読むことに対する態度や意欲を高める効果が見られたとは言えない。第2に、語彙に関する10項目について対応のあるt検定を行った結果、8項目において有意に差が見られた。よって、本活動が児童の語彙力を高める効果があったと言える。第3に、活動を楽しんだかどうかの問い合わせの平均値は、3.16であり、加えて児童の自由記述からも本活動を楽しんだ様子がうかがえたことより、音の出る絵本を使うことについて児童が肯定的にとらえていることが見られた。以上のことより、本活動を中学年に取り入れることは外国語活動の準備段階として意義があるものと考えられる。

1 はじめに

2011年度より全国一斉に外国語活動が小学校において5年生と6年生を対象に導入された。対象学年以外の学年での実施については、各学校の裁量に任されている。本研究は、小学校4年生の外国語活動の授業に音の出る絵本の導入が、小学校4年生の児童にどのような効果をもたらすかを調査するものであり、本格的に外国語活動が始動する高学年の外国語活動の準備段階としての中學年の外国語活動のあり方を探るものである。

本研究では、外国語活動に、課題を解決するために音の出る絵本を使用するグループ活動の時間を設置し、積極的に聞くこと、聞いたことをグループ内で分かち合う学び合いで、自主的な語彙の習得を促そうというものである。

2 先行研究のまとめ

2.1 読書、特に多読による学習

外国語習得では語彙力は重要な要因である (Ellis, 2008; Cameron, 2001)。語彙は、ドリルや丸暗記によるのではなく、文脈に支えられた comprehensible input (理解可能なインプット) (Krashen, 1989), しかも学習者にとって有意味であるインプットに多く浸ることで習得が促進されると言われている (Krashen & Terrell, 1983)。このようなインプットを提供する1つの手段として読書が挙げられる (Krashen)。Krashenは、学校内で感想文や読解テストを課さない5分から15分間の自由な自発的読書をした児童は、語彙テストにおいて、通常の授業を受けた児童と比べて、良いあるいは同じくらいの成績を取っていることから、自由な自発的読書は伝統的な教授法と同様の効果があると報告している。さらに、この自由な自発的読書を通常の授業に付加すると、概して高い語彙発達が生ずると述べている。氏木 (2009) によれば、英語を第2言語 (English as a second language, ESL), あるいは外国語 (English as a foreign language, EFL) においても、読書、とりわけ多読をすると、「語彙の意味検索速度が速く」なったり、「連語的な語彙ネットワーク

構築」がなされたりするとしている。つまり、読書、とりわけ多読では、語彙数そのものと同様、語彙力につながる力が向上するというわけである。だが、小学校外国語活動の学習指導要領では、音声重視で文字は補助的に扱うこととされているので、多読をそのまま組み入れるわけにはいかない。しかも、習得の初期段階では、文字の学習以前に多量の音声インプットが必要なのである。では、小学校で多読を取り入れるにはどのようにしたらよいか。

2.2 読み聞かせによる学習

文字を自分で読まず読んでもらう読み聞かせ、つまり音声を伴う読書は、母語発達においては、重要な役割を果たす。これは、子供の母語の獲得は、さまざまな文脈の中で何度も繰り返しことばを聞くこと、使うことによって、ことばを身体に染み込ませていくのが特徴であり、読み聞かせが、そのような環境、つまりさまざまな文脈の中でことばを子供たちに提供することができるからである。語彙習得においても、Wells (1986) は、小学校入学までに読み聞かせを多く聞いた英語母語話者の児童は、10歳の時点における習得語彙数が、読み聞かせの経験の少ない児童よりも発達していたと報告している。特に絵本の読み聞かせでは、子供は絵本を聞きながら、その絵と話の内容に支えられて、語彙を習得していくことができると思われる。

2.3 音声と絵の提示による学習

視覚的補助としての絵 (visual annotation) の存在は、大人にとっても聞き取りに役に立つ (Plass, Chun, Mayer & Leuther, 1998; Jones, 2003)。Jones では、keyword に絵をつけて提示し、text を聞き取る途中で何度もその絵を見ることができた参加者 (大学生) の方が、語彙の事後テスト (直後) と後追いテスト (3週間後) において、初めに keyword が音声のみで提示され、テキストの聞き取り中に何も視覚情報を得られない参加者よりも、良い成績であったと報告している。これは、絵 (画像) は mental model (心的表象) に直接結びつけられる (Kost, Foss & Lensini, 1999) ので、学習者は、聞き取った新しい情報を絵 (画像) によって概念と結びつけることができる (Oxford & Crookall, 1990; Terrell, 1986) からである。つまり、絵 (画像) は言語学習における聞き取りに効果的に働くと言える (Oxford &

Crookall)。Mueller (1980) では、聞き取りの際に、絵 (画像) は心的表象の構築の過程において大きく貢献し、あまり堪能でない学習者に特に役に立つと述べている。

さらに、Jones (2003) は、実験後のインタビューから、絵を見ることのできた参加者たちにとって、keyword の意味を探すこと、つまり聞き取った音声を絵の示していることと結びつけていくことは容易なことではなく努力が必要としていたということに注目している。これは絵と音声から keyword の意味を探る作業は、自動化されていないので、参加者たちにとっては意識的に努力しなければならなかったことを示している。Jones は、この努力があるからこそ記憶に残りやすいということを Salomon (1983) の理論 (学習において、自動化されない作業や心的努力をした分だけ学びが保持される) を用いて説明している。

2.4 音の出る絵本の使用と効果

以上のことから、本研究において音の出る絵本を使用する (読む・聞く) ことは、絵本の読み聞かせと同じような環境を作り出すことができ、その結果、文脈に支えられたインプットとの出会いを多くすることを可能にすると思われる。さらに本の中の絵は、直接心的表象の構築に役立ち、また、絵からその意味を持つ語彙を探求していくことは心的努力を必要とするため、その語彙の保持を促すとも思われる。

2.5 グループ活動による利点

さらに、課題解決のために音の出る絵本を使用することは、まず、音の出る絵本を聞くこと自体が子供たちにとって有意味になる。次に、課題解決をグループ活動で取り組むことで「一人の力では達成することが難しい課題を何人かで力を合わせて成し遂げる」(辻, 2010) という協同学習のよさを取り入れることができる。言語習得は、個人差が大きく、特に外国語 (英語) においては、個人の学習歴や成育歴に影響されやすい。このような差のある子供同士が、グループ活動で協同学習すると、「建設的な支え合い」(江利川, 2010) や、「個人の力では到達できない高い目標」(江利川) に向かうことができるようになるのである。つまり、聞き取りの苦手な児童も、聞き取れている他の児童と一緒に活動に参加

することで、はるかに多くを聞き取れる可能性が出てくると思われる。

3 研究課題の設定

音の出る絵本を用いた活動の直前に導入された語彙に、児童が課題解決のための活動中に積極的に何度も触ることは、その語彙が特定の文脈の中で視覚的補助である絵に支えられた音声インプットとして児童に提供されることになると思われる。そしてその結果、児童の語彙の理解を助け、その語彙力を高める可能性があると期待される。よって、本研究では以下の研究課題を立てた。

1. 音の出る絵本を外国語活動に取り入れることにより、児童の英語を読むことに対する意欲を高めることができたであろうか。
2. 音の出る絵本を外国語活動に取り入れることにより、児童の語彙力を高めることができたであろうか。
3. 児童は音の出る絵本を使った活動を楽しんだであろうか。

4 方法

4.1 参加者

参加者は、新宿区立愛日小学校4年生24名（男子12名、女子12名）である。愛日小学校では、小学校1年生より外国語活動を実施している。1年生と2年生はそれぞれ年間10単位時間、3年生と4年生はそれぞれ15単位時間、5年生と6年生はそれぞれ年間35単位時間である。全時間において、担任と外国語活動を担当している非常勤講師（小学校教員免許および中学校高校の英語教員免許を有する者）、そして外国語指導助手（ALT）が配置されている。外国語活動を担当している非常勤講師（以下非常勤講師）は、中学校との連携推進のために配置されており、1週間のうち、4日は同校に、残りの1日は同区内の中学校に勤務している。毎時の教案作成は非常勤講師によってなされるが、担任も事前に教案を検討している。しかしながら、ALTは、業務委託契約で派遣会社から派遣されているため、事前の打ち合わせは原則として行うことはできない。事前に非

常勤講師が派遣会社に送る教案が、打ち合わせの代行をしている。

各学年の外国語活動の内容は、以下のとおりである。

・1年生から4年生まで

テーマごとに、1単位時間あるいは2～3単位時間程度で、完結するように作られている。コミュニケーション重視で行われ、特に言語技術に特化した授業ではない。

・5年生と6年生

原則的に『英語ノート』に沿って行われ、適宜新宿区オリジナルの指導項目を取り入れている。よって、参加者である小学校4年生は、本実験が行われるまでに、およそ50単位時間程度の外国語活動を経験してきている。

また、本研究の行われた愛日小学校は、東京新宿区神楽坂近くにあり、当校の前身である東京府立第三小学校から数えると、東京で3番目に古い小学校であり、愛日小学校と命名されてからも創立132年になる。学区域は、昔ながらの商店街を含み大変落ち着いた地域であり、児童たちも穏やかに学習に取り組む姿が見受けられる。

4.2 質問紙によるアンケートの実施

2011年10月から12月までの計4回の音の出る絵本を取り入れた外国語活動の事前（第1回目の授業の始め）と事後（第4回目の授業の終わり）に、質問紙によるアンケートを行った。事前・事後に共通した質問紙の問い合わせは、英語で読むことに対する態度・意欲に関する3問（項目1～項目3）と絵本に含まれている英語の語彙に関する問い合わせ10問（項目4～項目13）である。項目1から項目3は、「はい」（4点）から「いいえ」（1点）までの4つの選択肢のうち、そうであると思われるものを選ぶ選択式であり、項目4から項目13は、言えると思われるものには「はい」を、言えないと思われるものには「いいえ」を選び回答するようになっている。また、事後のアンケートでは、本実験に対する感想に関する問い合わせ（項目14～項目15）と本研究中に行われた音の出る絵本に関する問い合わせ（項目16）を共通項目に追加した。項目14から項目15は、項目1から項目3同様「はい」（4点）から「いいえ」（1点）までの、当てはまると思われるものを選んで回答する選択式のものであり、項目16では、(1)から(4)について自由記

述の回答を求めた。

各項目は以下のとおりである。

- 項目 1. 英語で読むことに興味があります。
- 項目 2. 英語で読めるようになりたいです。
- 項目 3. 英語で読むことは楽しいです。
- 項目 4. 英語で風船が言えますか。
- 項目 5. 英語でヤギが言えますか。
- 項目 6. 英語でタコが言えますか。
- 項目 7. 英語でブタが言えますか。
- 項目 8. 英語でクジラが言えますか。
- 項目 9. 英語でカタツムリが言えますか。
- 項目 10. 英語でシマウマが言えますか。
- 項目 11. 英語でレントゲンが言えますか。
- 項目 12. 英語で花びんが言えますか。
- 項目 13. 英語で女王が言えますか。
- 項目 14. しゃべる絵本を使った活動は楽しかったですか。
- 項目 15. これからもしゃべる絵本を使いたいですか。
- 項目 16.
 - (1) 音の出る絵本を取り入れた活動は好きですか。
 - (2) 好きな人は、どういうところが好きですか。嫌いな人は、どういうところが嫌いですか。
 - (3) 導入した 4 冊の本のうちどの本が好きですか。
 - (4) なぜその本が好きなのですか。

4.3 実験手順

2011年10月から12月までの計4回の外国語活動に音の出る絵本を取り入れた活動のうち、1~3回の外国語活動では、1単位時間を前半と後半に分け、前半は非常勤講師とALTが後半のグループ活動において必要と思われる語彙を導入し、後半は調査者が課題を説明後、3~4人のグループで音の出る絵本を聞き、課題を解決する活動を行った。音の出る絵本は、各グループに1冊ずつ、また本にタッチすると音が出るペンを1人に1本ずつ配布した。4回目の活動では、1単位時間をすべて、音の出る絵本の活動に充て、前半に新たに導入する本（ボード形式）を聞いた後、後半には前3回までに使用した絵本をすべて配布した。これにより、前3回とは異なり、絵本が1人に1冊ずつ配布される状況を作り、本実験で扱った絵本すべての中から自分の好きな本を時間の許す限り聞く活動を行った。

使用した絵本は、絵が主体で、それを補うように

英語が書かれている。付属のペンで英文をタッチすると、それを読み上げ、人物や動物の絵をタッチすると英語を話したり鳴き声が流れたりする。また、背景をタッチすると風などの音や歌が流れるようになっている。さらに、絵本と読み手（聞き手）が相互交流するような形で、読むこと（聞くこと）を進められるようになっている。例えば、*Curious George Color Fun* では、George をタッチすると「Can you find a red balloon?」と指示し、次に赤い風船をタッチすると、「Red balloon. That's right.」と反応してくる。音声の指示どおりに次の行動ができるときには、正解であるというフィードバックが流れてくるので、読み手（聞き手）にとっては、達成感を味わうことができるのである。もし、指示どおりのタッチができなくても、タッチしたものの名前を英語で読み上げたり、音楽が流れたりするので、楽しさが減少するわけではない。

各回の活動内容と使用した絵本と出された課題は以下のとおりである。

10月17日 第1回

前半：色の語彙の導入、ゲーム
後半：使用した本 *Curious George Color Fun*
課題：各グループに割り当てた色のページで、おさるのジョージが指示しているものは何かを探す

10月31日 第2回

前半：反対語の語彙の導入
後半：使用した本 *Opposites*
課題：競争をした4人のうち誰が勝者であったか、名前を聞き取る

11月21日 第3回

前半：動物の名前の導入
後半：使用した本 *ABC Animal Orchestra*
課題：楽器の名前がいくつわかったか。また、最後に流れた曲の名前を言う

12月12日 第4回

前半：使用した本 *Tag Super Spellers*（ボード形式）
課題：A から Z までの単語が各ボックスに描かれているので、絵を見ながら英語で何というかを聞き取る。
後半：使用した本 *Curious George Color Fun, Opposites, ABC Animal Orchestra, Tag Super Spellers*

5 結果

5.1 データ収集法

音の出る絵本を取り入れる外国語活動の事前（第1回目活動前）と事後（第4回目活動後）にアンケートを調査者が児童に対して実施した。事前アンケートでは、記入前に記入の仕方を説明することに加え、小学校4年生ということを考慮して、調査者が、項目ごとに読み上げ、児童が記入する方法をとった。記入の仕方がわからない児童がいた場合、同席していた非常勤講師が、もう一度調査者と同様の説明をした。また、事後アンケートでは、記入前に新たに加わった項目14～項目16に関して調査者が記入の仕方を説明した。

さらに、事後に非常勤講師に全4回の活動の観察をして、音の出る絵本を取り入れた活動をどのように思うか、また、今後このような活動が5～6年生の外国語活動の準備段階として中学年に取り入れられることは可能であるかどうかについてインタビューを行った。

5.2 データ分析法

英語を読むことに対する態度・意欲について事前・事後において変化を調べるために、項目1から項目3に関して、統計解析ソフトSPSSを用いて対応のあるt検定を行った（表1）。また、絵本に出てくる英語の語彙が言えるかどうかについて、事前・事後においての変化を調べるために、項目4から項目13に関しても、統計解析ソフトSPSSを用いて対応のあるt検定を行った（表2）。さらに本活動を楽しんだかどうかについて調べるために、項目14と項目15に関して、平均値を求め（表3）、項目16に関して、質的分析を行った。

5.3 データ分析結果

英語を読むことに対する態度や意欲が全4回の活動でどのように変化したかを調べるために、項目1から項目3について対応のあるt検定を行った結果、有意な差は見られなかった（表1）。

絵本に出てくる語彙に関する項目4から項目13について対応のあるt検定を行った結果、項目7と項目12については有意に差が出なかったが、その他の8項目において有意に差が出た（表2）。（項目4, $t(24)$

■表1：英語を読むことに対する態度や意欲

	事前		事後		t値
	平均	SD	平均	SD	
項目1	2.40	.96	2.48	1.36	- .46
項目2	3.32	.85	3.32	1.18	- .47
項目3	2.28	1.06	2.68	1.14	-1.84

* $p < .05$

= 2.82, $p < .05$, 項目5, $t(24) = 2.59, p < .05$, 項目6, $t(24) = 4.00, p < .05$, 項目8, $t(24) = 4.34, p < .05$, 項目9, $t(24) = 3.77, p < .05$, 項目10, $t(24) = 3.67, p < .05$, 項目11, $t(24) = 4.71, p < .05$ および項目13, $t(24) = 4.41, p < .05$

■表2：語彙に関する項目

	事前		事後		t値
	平均	SD	平均	SD	
項目4	.40	.50	.76	.44	-2.82*
項目5	.04	.20	.32	.48	-2.59*
項目6	.28	.46	.68	.48	-4.00*
項目7	.60	.50	.80	.41	-2.00
項目8	.08	.28	.52	.51	-4.34*
項目9	.04	.20	.48	.51	-3.77*
項目10	.24	.44	.60	.51	-3.67*
項目11	.00	.00	.48	.51	-4.71*
項目12	.08	.28	.28	.46	-2.00
項目13	.36	.49	.80	.41	-4.41*

* $p < .05$

音の出る絵本を使った感想について、音の出る絵本を使った活動が楽しかったかどうか（項目14）の平均値は3.16、今後もこのような本を使いたいかどうか（項目15）の平均値は2.92となったことからも、児童は音の出る絵本を使うことについて肯定的であると言える（表3）。

■表3：音の出る絵本を楽しんだかどうかに関する項目

	事後	
	平均	SD
項目14	3.16	1.34
項目15	2.92	1.32

項目16についての児童の記述は以下のとおりで

ある。

(1)「音の出る絵本を取り入れた活動は好きですか」について、17人（70.8%）の児童が「はい」、「好きです」、「どちらかといえば好き」などと肯定的に答えている一方、4人（16.7%）の児童が「いいえ」、「嫌いです」、「どちらかといえば嫌い」などと否定的に答えている。また、3人（12.5%）の児童が普通と答えている。

また、(2)「好きな人は、どういうところが好きですか。嫌いな人は、どういうところが嫌いですか」について、好きだと回答している児童は、

- ・しゃべるところが好き（12人）
- ・歌を歌ったり、動物の鳴き声がするところが好き（5人）
- ・楽しみながら英語が学べ、英語が覚えられるところが好き
- ・正しい発音が聞けるところ
- ・絵をペンでタッチしたらその絵と関係あることを言っているからわかりやすい
- ・絵がきれいで色もきれいだったから
- ・人気のキャラクター（おさるのジョージなど）が出てきたから
- ・絵が面白いから

などとその理由を記述している。嫌いであると回答した児童は、

- ・速く言うから
- ・ちゃんと日本語でその文字を教えてくれないから

と記述している。

さらに、(3)「導入した4冊の本のうちどの本が好きですか」（複数回答可）については、3回目に導入したABC Animal Orchestraが17人、1回目に導入したCurious George Color Funが14人、4回目に導入したTag Super Spellersが13人、2回目に導入したOppositesが11人の児童がそれぞれ列挙している（表4）。また、この質問に対しては、複数回答を可能にしたので、4冊すべてを挙げている児童が5人、3冊挙げている児童が2人、2冊挙げている児童が9人、1冊のみ挙げてる児童が11人いた（表5）。

■表4：好きな本ランキング

好きな本の名前	人数
ABC Animal Orchestra	17人
Curious George Color Fun	14人
Tag Super Spellers	13人
Opposites	11人

■表5：好きな本の冊数

好きな本の冊数	人数
4冊	5人
3冊	2人
2冊	8人
1冊	9人

最後に、(4)「なぜその本が好きなのですか」については、一番多くの児童が列挙したABC Animal Orchestraでは、

- ・最後のページで音楽が流れるのが楽しい
- ・いろんな楽器がABCの順に出てきたから
- ・最後に、いろんなバージョンのABCの歌が流れるところが面白かった
- ・楽器と動物が一緒にわかって面白いから
- ・音楽も聞け、英語が楽しめるから
- ・大文字と小文字がわかるから
- ・動物が演奏していたところが面白かったから
- ・アルファベット順になっていて楽器の音も鳴るからです
- ・最後の歌が面白い
- ・絵が面白かったから
- ・気に入った音があっていいと思った

2番目に多かったCurious George Color Funでは、

- ・おさるのジョージが好きだから
- ・英語の問題だけど唯一「5」がわかるから
- ・しゃべるのがわかりやすいし、面白いから
- ・正しい色の書き方と発音がわかるから
- ・オーレンジなどカラーを言ったのが絵にも書いてあるから
- ・色がきれいでいいなと思って
- ・カラフル

Tag Super Spellersについては、

- ・1個ずつそのものの名前がわかったからわかりやすかった
- ・ABC順に並んでいて、クイズがあったから
- ・アルファベット順になっていて絵も楽しいから

- ・たくさん英語が聞けたから、面白かった
- ・わかりやすい

*Opposites*については、

- ・音が面白い
- ・競争だったから
- ・全部反対言葉が出てくるし絵も付いているから
- ・競争していく誰が一番かわくわくしたからとそれ理由はさまざまである。さらに、(3)において複数回答している児童のうちそれぞれの本についてではなくひとまとめに以下のように述べているものもあった。
- ・絵が面白かった
- ・絵がきれいでわかりやすかった
- ・しゃべるところやカラフルなところです
- ・タッチするのが楽しかった
- ・みんな音楽もあって楽しかった
- ・音楽が楽しい。絵を使ってきれいだから。いろいろな反対言葉が書いてあって面白い
- ・話が面白い。音が面白い
- ・しゃべるからわかりやすくして、面白いから

5.4 非常勤講師へのインタビューとその回答

以下は、1回～3回の前半の語彙導入をし、また、全4回の絵本を取り入れた活動を観察した非常勤講師に、本活動についてインタビューした内容とその回答である。

- ・音の出る絵本の活動をどう思いましたか：

自分のペースで行ったり来たりできるのがいいと思いました。意外と聞けてないかなと思いましたが、(児童が)聞いていたので不思議だと思いました。全部はきちんと捨えないけれど、一部の音が入っていたりして、面白いなと思いました。グループ活動では、メインの児童が自分のペースで、他の児童はちょっと空いているところをペンで押すというふうになってしまい、たぶん楽しんではいると思いますが。しかしグループ活動で行うと、「これなんとかって言っているよ」という教え合いがあるから、それはそれで楽しんでいたと思います。

今日（第4回）は、1人に絵本を1冊ずつ与えたので、前3回でやったことを確かめている児童がたくさんいました。1人でやると自分のペースで、聞きたいところを何回でも聞けるの

で、前のお気に入りを何回もやったり、もう少しやりたかったけれどもできなかったところをできたんだなと思いました。外国語活動自体は、相手がいる conversation がいいのかなとも思いました。4年生ぐらいだったら、1単位時間すべてを音の出る絵本の活動で費やすのではなく、始めの10分くらい前段階として帯で入れるといいかなと思いました。

- ・これからこの活動を組み入れたら効果はあると思いますか：

メインではなくて補助的な活動とか、興味の入り口には、すごくいいかもしれないです。構えて斜めに見ているような子をほぐすのにはいいのかもしれません。

- ・この活動で気になった児童はいましたか：

通常の教室での外国語活動では、特にこの4年生は決まった児童が発言する傾向があるので、それ以外の児童は英語を好きなのか、興味があるのかがわからなかったのですが、音の出る絵本の活動では、そういう児童たちの中にもほんとよく聞いて、一生懸命に取り組んでいる児童が何人かいました。勝手にやっていくのではなくて、何人かでやっていくと、質問を受けたり、「こうだよ」とかやり取りが生まれると、それはそれで楽しいなって、自律活動をしながらも interaction があると思いました。

5.5 調査者の観察データ

5.5.1 第1回目

絵本の大きさが小さかったにもかかわらず、各グループともうまく本を共有して聞いていた。また、それぞれ聞き取れた児童が、うまく聞き取れない児童に教え合っている姿も見られた。課題として割り当てられたページ（各グループには、割り当てたページでジョージが何を指示しているかを聞き取るように課題を出してある）以外のページについても本から出てくる指示を聞き取ることができたグループがほとんどだった。最後に、割り当てられたページの答えを発表をするときには、各グループとも自信たっぷりといった表情であった。

5.5.2 第2回目

1回目よりも、積極的に何度もペンを絵本にタッチし、聞き取ろうとする態度が見られた。課題は、

競争の勝者の名前を聞き取ることであった。最後のページの絵を見ると勝者が誰であるかは一目瞭然であるのだが、その名前は絵からはわからない。児童たちは、その名前を聞き取るためにどの部分をタッチすればよいかを懸命に探している様子であった。絵本を読む・聞く目的がはっきりしていると、たとえ英語が聞き取りにくくても、あきらめずに積極的に聞きたくなるからであろう。さらに、1人での活動ではなく、グループの活動であったため、お互いに励まし合いながら聞けたことが積極的に取り組むという態度の現れに起因しているように思われる。残念ながら、正確に勝者の名前を聞き取れたグループはなかったが、それに近い名前（音）を答えることができたグループは2つあった。

5.5.3 第3回目

児童たちにとって耳慣れない動物の名前を前半で導入し、また、絵本の中には聞いたことのない楽器の名前が、アルファベットの数だけ登場する。よく聞くと動物の名前と楽器の名前は、語頭の音が同じであるが、児童には、初めての語彙が多くて、聞き取るのが大変なようであり、語頭の音が同じであることに気づいた児童はほとんどいないようであった。ただ、最後のページには聞きなれた曲（きらきら星）が流れてくるので、そこまでたどり着くとほっとしているようであった。前2回に比べると、1ページを聞き終えるのに時間がかかっているようであった。Aから順番に、聞き取れた児童が楽器の名前を発表したが、なかなかわからないものもあった。ほとんどの単語が児童には未習であったため、覚えているのは難しかったであろうと思われる。聞いているときはわかっているのだが、ページをめくって、次の音（単語）が聞こえてくると、それに夢中になり、前のページの楽器の名前を思い出せないようであった（10分では短く、何度も聞き返す時間があれば、覚えられたのかもしれない）。

5.5.4 第4回目

前半の導入をせず、初めからペンを持ちグループ活動を始めたが、児童たちがこの活動に慣れてきたいか、何の混乱もなく、聞き始めた。4回目で使用した教材は、AからZまで、それぞれの文字が語頭になる単語の絵が描かれており、ペンから流れてくる音もその単語を読み上げているものであった

ので、自分の知っているもの知らないものを確かめながら、タッチしているようであった。しかし、児童の中には、それぞれの絵が描かれている以外の部分をタッチし、その本（ボード形式）には今回使用していないゲームもあるのだが、そのゲームの説明を聞き取り、そのゲームはできないのかと尋ねてくる児童もいた。

後半では、それまでに使用したすべての本を各グループに配布し、各児童が、1冊ずつ自分が好きな絵本を持って、活動した。どの児童も、自分のペースで絵本を読み・聞くことができるので、飽きずに何度も、また、隣の友人と絵本を交換しながら、活動していた。それぞれの児童がお気に入りの本やページがあるようであった。

6 結果と考察

6.1 研究課題1～3の結果分析

研究課題1。「音の出る絵本を外国語活動に取り入れることにより、児童の英語を読むことに対する意欲を高めることができたであろうか」については、質問紙の項目1～3すべての項目において対応のあるt検定を行った結果、有意差が出なかった。これは、4回という少ない回数の活動であり、しかも課題解決のために音の出る絵本を使用した結果、自分が絵本を読んでいるというより絵本から出てくる音を聞いているという意識であったため、読む意欲にまでつなげられなかつたからだろうと思われる。

研究課題2。「音の出る絵本を外国語活動に取り入れることにより、児童の語彙力を高めることができたであろうか」については、質問紙の項目4～13すべての項目において対応のあるt検定を行ったところ、項目4、項目5、項目6、項目8、項目9、項目10、項目11、項目13の事後において有意に高くなっていた。音の出る絵本を使用する活動が、児童の語彙力を高めるのに効果があったと思われる。これは、絵（画像）が語彙の聞き取りの役に立つと報告しているJones (2003) の結果と一致する。以上のことより、グループ活動での、音の出る絵本を取り入れた活動はおおむね、本格的に外国語活動が始まる準備段階としての4年生の語彙の習得には効果があったと言えよう。

研究課題3。「児童は音の出る絵本を使った活動を

楽しんだであろうか」については、項目14, 15の平均値がそれぞれ3.16, 2.92であったことから、7割以上の児童が楽しんでいたことがうかがえるほか、項目16の自由記述から、70.8%の児童が好きあるいはどちらかといえば好きと答えているのでおおむね楽しんだと言えるであろう。

また、その理由として、絵本の中に文字があること、アルファベット順に語が出てくること (ABC Animal Orchestra), 話が面白いこと、言葉だけではなくいろいろな音や音楽があること、絵があるので音声の意味がわかりやすいこと、絵が面白いこと、ペンでタッチすることなどが多く挙げられている。つまり、音の出る絵本の活動を好きである理由として、絵本から音が出るという意外性、その絵本から英語以外に、風の音や車の音、また楽器の音、楽曲などの絵本の文脈を支えるさまざまな音が出る多様性、絵本のストーリーの面白さ、音声が表しているものが描かれている絵の面白さ、また何度も好きなところを聞ける個々人のやり方に合わせられる柔軟さ (Jones, 2003) など、児童にとって聞き取ることに積極的に取り組めるための補助的要素が絵本の中に入っていたからであろうと思われる。

6.2 非常勤講師の考察

本活動4回すべてに同席、補助をした非常勤講師は、以下の3点を挙げていた。

まず、本と行ったり来たりする interaction があったと指摘している。これは、一人一人の児童が、人間を相手にしなくとも、音の出る絵本に自らの意思でタッチすること、そこから流れてくる音声で次にタッチする場所を児童自ら決定することなど、絵本との interaction が生まれていたことを示している。本を読むことは、本と interaction をしながら進めていくことであるので、児童が音の出る絵本と行っていた interaction は、まさに、reading の始めの1歩であるのは言うまでもない。まだ英語の文字を読むことが未習の児童も、このような経験をすることは貴重であると思われる。

次に、普段見ることができない児童の姿を見られたと指摘している。普段外国語活動に消極的な児童が、一生懸命絵本を聞こうとしている、絵本に積極的にかかわろうとする姿が活動中に見られたというのである。日本における外国語活動は、口頭で、クラス単位で行われていることがほとんどである。普

段から口数の少ない児童、英語に自信のない児童、間違えたら恥ずかしいと思っている児童など、どうしても声を発することに積極的になれない児童は、通常の外国語活動では、なかなか積極的に英語とかかわることが難しいように思われる。しかしながら、本活動のように、個人として英語とかかわることができるとができる場合、個人の個性を生かしたかわり合い方ができる可能性があると思われる。1単位時間は短いが、その中で少しでも積極的に英語とかかわることのできる時間を設けることが、外国語学習に対する動機づけを高めることになると言えるのではないだろうか。

最後にグループ活動が児童の積極的な聞く態度を引き出していたと指摘している。これは、江利川 (2010) にもあるように、協同学習によって、「建設的な支え合い」がグループのメンバーによって行われれば、聞き取ることができない児童も聞き取ることができた児童から教えられ、聞き取ることができるようになり、また、お互いに聞き取ったことを持ち寄り、そこからさらに聞こうとして、1人では聞き取れずあきらめてしまう場面でも、グループ活動が課題に果敢に向かっていくことを可能にするからだと思われる。

以上のことから、非常勤講師も外国語活動には、さまざまな授業形態を導入し、児童の個性が授業に反映できるような多角的視点で授業内容を検討すべきであるとした上で、本活動が有意義であり、外国語活動を本格的に始まる準備段階として取り入れることは可能であろうと述べていた。

6.3 本教材の取り入れ方、またその長所と短所

活動が回を追うごとに児童たちが、絵本との interaction を楽しむことができるようになったり、課題解決に必要な箇所以外のさまざまなところを聞き楽しんでいたことを筆者も観察した。児童の自由記述からもわかるように、絵本ごとに、その内容を楽しんでいるようであった。これは、単に絵本から音が出るという単純な理由からではなく、絵をタッチすれば何度でも音声を聞くことができ、次第に絵の示している意味と音声とを結びつけ、つまり音声をことばとして認識でき、その結果、内容を理解し英語がわかったと思ったからではないかと思われる。また、グループ活動によって、1人では聞き取

れないところも教え合いながら聞き取れていったようである。つまり、聞き取りにおいて、1人ではできないことを協同学習で成し遂げられるようになったと思われる。

しかしながら、児童の自由記述の中には、「ちゃんと英語の文字を教えてくれないから」、また「早く言うから」、などという理由で音の出る絵本を取り入れた活動を好きになれない児童がいることを忘れてはならない。学習するということについて、それぞれの児童の受け取り方も違うのである。どの児童も楽しめる活動を作り上げていくのは非常に困難なことではあるが、1単位時間にどの児童も一度は楽しかったと思えるような活動を作り上げていくことが肝要と思われる。

英語の文字を学習していない児童たちにとって、音の出る絵本は音が主体のものであり、読むという意識で取り組んではいなかったようである。しかしながら、この活動を続けていくと、音の出る絵本の中にある文字にも注目していき、だんだんと読むという意欲に変わっていくのではないだろうか。

7 まとめ

本実験において英語の本を読む意欲を上げることはできなかつたが、音の出る絵本の活動としては児童に好ましいと受け入れられたことがうかがえ、また、語彙力を上げることができたと言えるのではな

- 参考文献 (*は引用文献)
* Cameron, L.(2001). *Teaching languages to young learners*. New York: Cambridge University Press.
* Ellis, R.(2008). *The study of second language acquisition*. Second edition. Oxford: OUP.
* 江利川春雄. (2010). 「英語教育に“なぜ”“どう”協同学習を導入するか」. 『英語教育』7月号.
* Jones, L.C.(2003). Supporting listening comprehension and vocabulary acquisition with multimedia annotations: The students' voice. *The Computer Assisted Language Instruction Consortium (CALICO)* 21, no.1: 41-65. Retrieved February 12, 2012, from http://jan.ucc.nau.edu/~jgc/512/listening_jones_plass.pdf
* Kost, C.R., Foss, P. & Lensini, J.J.(1999). Textual and pictorial glosses: Effectiveness on incidental vocabulary growth when reading in a foreign language. *Foreign Language Annals*, 32, 89-113.
* Krashen, S.D.(1989). We acquire vocabulary and spelling by reading: Additional evidence for the input hypothesis, *The Modern Language Journal*, 73, 440-464.
* Krashen, S.D. & Terrell, T.D.(1983). *Natural Approach: Language acquisition in the classroom*, N.J.: Alemany Press.
Meskill, C.(1996). Listening skills development through multimedia. *Journal of Educational Multimedia and Hypermedia*, 6, 179-201.
* Mueller, G.(1980). Visual contextual cues and listening comprehension: An experiment. *The Modern Language Journal*, 64, 335-340.
* Oxford, R., & Crookall, D.(1990). Vocabulary Learning: A Critical Analysis of Techniques. *TESL Canada Journal*, 7, 2: 9-30. Retrieved February 12, 2012, from <http://www.teslcanadajournal.ca/index.php/testl/article/viewFile/566/397>
* Plass, J.L., Chun, D.M., Mayer, R.E. & Leuther,

いだろうか。

今後の課題として、どの程度児童が聞き取れる教材がこのような活動に適切であるかが挙げられるであろう。第3回目に使用した絵本 (*ABC Animal Orchestra*) は、本実験の参加した児童にとって聞き取るのが難しかったようだが、活動中に課題を十分に終えることができなかつたにもかかわらず、過半数以上の71%の児童が好きな本に選んでおり、使用した4冊の絵本の中で一番人気を集めた本であった。聞き取りやすく理解しやすいことと児童が面白い（好きだ）と思うことが必ずしも一致していないことが興味深い。このことより、このような音の出る絵本を取り入れる活動に使用する絵本の選択が今後の研究課題になるであろう。

謝 辞

本研究を実行するにあたり、新宿区立愛日小学校校長岡本由美先生、および外国語活動担当ヴォーゲルみゆき先生、また参加者のクラス担任の鈴木正樹先生に多大なご協力をいただいたことに対し心より感謝申し上げる。また、本論文作成にあたり丁寧にご指導くださった和田稔先生、このような機会をくださった(財)日本英語検定協会に、深く感謝を表したい。

〈共同研究者〉

カレイラ 松崎 順子

- D. (1998). Supporting visual and verbal learning preferences in a second language multimedia learning environment. *Journal Educational Psychology*, 90: 25-36.
- *Salomon, G. (1983). The differential investment of mental effort in learning from different sources. *Educational Psychologist*, 18(1), 42-50.
- *Terrell, T.D. (1986). Acquisition in the Natural Approach: The Binding/Access Framework.
- Modern Language Journal, 70: 213-227.
- *辻伸幸. (2010). 「小学校外国語学習における実践学びの質を高める協同学習」.『英語教育』6月号.
- *氏木道人. (2009). 「語彙、文法学習における多読の意義」.『英語教育』2月号.
- *Wells, G. (1986). *The meaning makers: Children learning language and using language to learn*. Portsmouth, N.H.: Heinemann.